

「灰色」にない *Gray* の要素

— 日本語と英語の色彩語カテゴリーの比較 —

山田 仁子

序

英語の *gray* (*grey*) は日本語の「灰色」とほぼ同義とするのが一般的だが、*gray* を「灰色」と置き換えることが困難な場合は多く、英語の *gray* と日本語の「灰色」が表す意味は完全に一致しているとは言えない。例えば“gray hair,” “gray light” は英語ではよく用いられる表現だが、日本語ではこれらの *gray* を「灰色」に置き換えた「灰色の髪」「灰色の光」といった表現はほとんど見られない。“gray hair” や “gray light” の *gray* は、日本語の「灰色」とは異なる意味で用いられていると考えられるのである。

異言語間での色彩語を比較する際に問題にされてきたのは、Berlin & Kay (1969) など多くの色彩語彙の研究において主には2つの点についてであった。まず色彩語の数、次に色彩語が表す色の範囲についてである。例えば英語と日本語の色彩語を比較すると、基本的な色彩語は共に11語あるとされる。だがその11語の内の一つであり、かつ同じ色を表すとされる英語の *blue* と日本語の「青」では、プロトタイプの色はほぼ一致するものの、その語で表される色の範囲は随分と異なる。Berlin & Kay (1969) がマンセルの色彩チップを用いて示した図では、英語の *blue* が黒に近い濃い紺色から白に近い薄い水色まで幅広い色を表すのに対し、日本語の「青」が表すのはその半分以下の範囲に限られる。

これに対し Biggam (2012) は、色彩語の数とその範囲に加え、色彩そのものとは別であるにもかかわらず色彩語彙に組み込まれる要素や、色彩にとって重要な性質として色彩語彙の中に言語化される色彩の構成要素も分析の対象とすることが、色彩語彙の研究に必要であるとする。言語によっては色彩経験に伴う色彩以外の感覚なども、色彩語の一部として含む。例えばユカテック語では視覚対象となる物の「質感」(texture) が色彩語に組み込まれて言語化される。(Bricker (1999)) また、色彩の構成要素には「色相」(hue)、「彩度」(saturation)、「色調」(tone)、「明度」(brightness) といった異なる性質があり、この中のどれを色彩にとっての重要な性質として色彩語彙に言語化するかは、言語によって異なるとする。Biggam は英語など多くの言語の色彩語彙において、「色相」が最も重要な性質として言語化されるとする。

しかし英語の *gray*, *white*, *black* については、英語の色彩語彙における位置付けが明確ではない。Biggam は「色相のない」色として他の色彩語彙とは別グループにこの3色をまとめ、さらにこの3色間の違いは「色調」(tone) の違いとして説明する。しかし同時に、

「色相」のある一般的な色は、この3色が混じる度合いにより「色調」が変化すると説明する。「色調」によって規定されるこの3色が、他の色の「色調」を説明するのにも用いられるという、「色調」についても、3色についても、それぞれ独自に客観的に規定するには至っていないと判断される。

英語話者の多くが「色」と言えば「色相」とほぼ同義と捉える現在の状況において、「色相がない」という規定は、*gray*, *white*, *black*の3色について、色であって色でないといった、色彩語彙の中では特殊な位置付けをする結果になっている。この3つの色彩語は実際には何を表す語として用いられているのか、「色」なのか、「色」であるとするならばその「色」とは何なのか、「色」を表さないのであれば何を表すのか、といった問題を明らかにすることが、英語の色彩語彙を明らかにするためには必要であると考えられる。本研究ではこの「色相のない色」を表す3語の中から特に *gray* を取り上げて、この語が実際に用いられている例をコーパスなどから収集し、*gray* が何を表すのかその使用コンテキストから分析していく。

1. Grayと「灰色」の連語

アメリカ英語について5億2000万語以上という大量のデータを格納するCOCAコーパス (<http://corpus.byu.edu/coca/>) で、*gray* の後にどのような語が続いて登場しやすいかその頻度を調べると、以下のような結果が得られる。頻度の多いもの15語を表1としてここに挙げる。

	Grayで形容される語	出現数
1	HAIR	1272
2	DAVIS	716
3	EYES	685
4	AREA	397
5	SUIT	333
6	SKY	234
7	MATTER	201
8	LIGHT	195
9	WOLF	181
10	AREAS	181
11	CLOUDS	160
12	BEARD	154
13	HAIRS	150
14	STONE	146
15	WATER	143

表1. Grayで形容される語の頻度

表1で2番目の“Gray Davis”は人名、4番目と10番目の“gray area(s)”は比喩的な用法、7番目の“gray matter”は脳や脊髄の灰白質を表すという固定した用法、9番目の“gray wolf”は動物の種類、また15番目の“gray water”は「家庭排水」のことを指す専門用語であり、いずれも一般的な色彩語彙の形容詞としてのgrayの用法とは異なる性質を有するため、表1においては網がけにして区別し、今回の分析対象からは外すこととする。なお、“gray water”の使用は1970年代から見られる比較的新しい表現であり、その定義は辞書で次のように記されている。アメリカ英語“gray water”については、『メリアム・ウェブスター辞典』での定義を(1)に、イギリス英語“grey water”については『オックスフォード辞典』での定義を(2)に転記した。

(1) gray water: household wastewater (as from a sink or bath) that does not contain serious contaminants (as from toilets or diapers)

First Known Use of gray water 1977

(<https://www.merriam-webster.com/dictionary/gray%20water>)

(2) grey water: The relatively clean waste water from baths, sinks, washing machines, and other kitchen appliances.

(https://en.oxforddictionaries.com/definition/grey_water)

“gray water”という表現における gray が「それほど汚くなく利用可能」という良い方向性を持って使われる点は興味深い。“gray water”に対比する形で“black water”という表現も以下のように存在する。

(3) black water: Waste water and sewage from toilets.

(https://en.oxforddictionaries.com/definition/black_water)

“gray water”の gray は、「grayである」というよりも「blackではない」という意味で用いられている。つまり「汚れた状態」を表すblack から離れる性質を“gray water”のgrayは表しているのである。gray のカテゴリーは「black であるかないか」、「white であるかないか」という2種類の境界によって生成されている。red などのカテゴリーが red らしいプロトタイプを中心に生成されるのとは対照的な種類のカテゴリー生成と言える。

一般的な色彩語彙の用法として英語grayが形容する対象としては、結局、“hair(-s),” “eyes,” “suit,” “sky,” “light,” “clouds,” “beard,” “stone”という順で頻度が高いことになる。ただし、ここで“hair”と“hairs”は数えられない名詞、数えられる名詞という違いがあるものの、基本的には同じものとしてここでは取り扱う。

一方、日本語の色彩語「灰色」を、日本語 1 億 430 万語のデータを格納する『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>)で検索すると、後に続く名詞の頻度は下の表2に示す結果が得られる。この表に含まれる9語以

外はその出現数が非常に少ないため、ここでは扱わない。ただしこの表には含まれていない衣類(服/コート/シャツ/スーツ/ズボン)についての例は、個々の語の例は少ないのだが、「衣類」としてまとめると24例というかなり多い出現数になる。

	「灰色」で形容される語	出現数
1	雲	29
2	空	19
3	目/眼/瞳/眸	19
4	髪	7
5	石	6
6	壁	5
7	コンクリート	4
8	霧	4
9	海	4

表2. 「灰色」で形容される語の頻度

コーパスの規模の差もあり、単純に比較はできないものの、二つの表を比較することで、英語の *gray* と日本語の「灰色」が形容する語の共通点と相違点を確認することができる。まず、共通点として、「雲」、「空」、「目」、という日本語「灰色」が形容する語としての頻度が高い上位の3語については、英語 *gray* でも “clouds,” “sky,” “eyes” としてその頻度が高いことが認められる。「石」「壁」「コンクリート」は同種の物と判断できるが、これも英語 *gray* の場合の “stone” に対応する。英語 *gray* の表1に見られる “suit” は、日本語「灰色」の表2に直接相当する語はないが、先に述べたように「衣類」という種類でまとめると「灰色」が形容する語の出現数は24となり、「衣類」に関する語は *gray* も「灰色」も共に形容する頻度が高いと言えるだろう。

英語の *gray* と日本語の「灰色」を形容する語についての相違点としては、2点明らかになった。第一の相違点としては、英語の表1で最も頻度が高い語となった “hair(-s)” が、日本語の表2にも「髪」として見られるはするが、その頻度には大きな差が観察されるという点である。英語の *gray* は “hair(-s)” を形容する例が他の語よりも圧倒的に多いのだが、日本語の「灰色」が「髪」を形容する例は少ない。“hair” と同種のものと同判断される “beard” も、英語では *gray* が形容する対象として多く見られるが、日本語で「灰色の髭」という表現はわずかしか見られなかった。

第二の相違点としては、日本語の「灰色」がほとんど形容することのない「光」を表す語 “light” を、英語の *gray* が形容する例がかなり多いことである。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』以外にネット検索などすれば「灰色の光」という表現が見られないことはない

が、修辭的に感じられる場合が多い。日本語の一般的用法としては認めがたい表現と言えるだろう。

本稿では、上のコーパスを用いた比較から明らかになった英語の *gray* と日本語の「灰色」の形容する語についての二つの相違点について、その根源的な理由を明らかにしたい。そのために日本語の「灰色」にない英語 *gray* の用法を明確にする。まず次の2章で“hair”を形容する *gray* が何を表すのかを分析し、続く3章で“light”（光）を形容する *gray* が何を表すのかを分析していくこととする。具体的な使用コンテキストを吟味して、実際にことばとして用いられる際に、言語使用者の頭の中で対象物がどのように捉えられ、それが *gray* という語に反映しているのかを探りたい。

2. Gray hair: 色相なしの色 *gray*

日本語の「灰色」は「髪」を形容することがあまりないのに対して、英語では *gray* が“hair(-s)”を形容することが非常に多い。また「髪」だけでなく「髭」についても同様のことが言え、「灰色の髭」とはあまり言わないのに対して“gray beard”はよく使われる表現となっている。

“gray hair,” “gray beard”が実際にはどのように用いられるのかを、まずコーパスの例から観察する。次に挙げる例(4)～(7)は“gray hair”を含む例で、“elderly,” “sixty,” “wrinkles,” “years,” “too much . . . for a woman so young”などの共起する表現から、いずれも加齢とともに見られる髪、つまり「白髪」あるいは「白髪交じりの頭髪」のことを表していることが明らかである。¹

(4) An elderly man with a large pocked nose and wild gray hair . . .

(5) Paley is a small man of about sixty, with thinning gray hair . . .

(6) She will know that her wrinkles and gray hair are the outward signs of the accumulated wisdom of her years.

(7) . . . her granddaughter definitely had too much gray hair for a woman so young . . .

“gray hair”は、次の例(8)のように“gray hairs”と複数でも用いられる。この場合には、頭髪全体をひとまとめに捉えるのではなく、「白髪」の1本1本が意識されている。

(8) A slender woman with sandy blond — that had begun to sprout a few gray hairs now that she had passed forty, . . .

gray は本来の髪の色と白髪が混じった頭髪全体の色も、1本の髪の毛が「白髪」になっ

¹ 例文などにおいて特に重要と判断する箇所には適宜下線を施す。

た色も表すことができるのである。

ただここで一つ注意しておきたい点は、“white hair(-s)”という表現が「白髪」を表すのに用いられないわけではないことである。頭髪全体にしろ、1本の髪の毛にしろ、いずれも *white* と認識される場合には“white hair(-s)”と表現される。次の(9)は年老いた女性の頭髪を *white* と描写し、また(10)ではおそらくまだ若い人物が髪を脱色することで (“bleached”)、自分の頭髪を明らかな *white* にしてしまっている。

(9) The old woman had white hair.

(10) . . . a copiously tattooed young woman with a nose ring and bleached white hair

“gray hair”と“white hair”はどちらも日本語の「白髪/しらが」に対応するが、やはり使い分けられるほどの意味の違いはある。次の例(11)では、白髪が全くない状態を表しているが、“gray hairs”も“white hairs”もその存在を否定することで、加齢による髪色の変化が全くないことを表現している。*gray*は色の変化の程度が浅く、*white*は色が完全に変化して明確な白色が見られる様子を表していると判断される。

(11) His hair was thick and a uniform dark brown, with no gray or white hairs to mar the youthful looks that hid his age so well.

次に挙げる(12)(13)は、髭(beard)が *gray* で形容される例である。やはり、(12)の“deep wrinkles”、(13)の“aged”が示すように加齢と共に変化した髭の色を表している。(13)では髭と頭髪がまとめて *gray* と描写されている。

(12) He had a gray beard and deep wrinkles like the folds of a gown.

(13) . . . he resembled an aged Huck Finn, with a long gray beard and hair, mauve hands, and eyes as bright as blueberries.

*gray*と描写されるのは頭髪や髭だけではない。次の例(14)では顔(face)が *gray*と形容されている。

(14) Oddly, the breathlessness had disappeared and the usually gray face had become flushed with excitement.

「灰色の顔」と日本語に訳すと不気味だが、ここでの *gray*は日本語の「灰色」とは異なると考えられる。(14)の *gray*は後に出てくる“flushed”(紅潮した)と対比して用いられていることから、いわゆる「灰色」という色を表すというより、「血の気がない」様子を表していることが分かるのである。

gray はさらに植物などが枯れたり乾燥したりすることにより変化した色を表すこともある。

次の例(15)(16)では、もともと *green* や *purple* であった植物や花が乾いて色が変わる様子を “turn gray” と表現している。

(15) If summer rains do not come, green plants turn gray as they dry out, . . .

(16) Although the flowers look like purple grapes when fresh, they soon turn gray and then yellowish brown . . .

しかしここでも植物や花の枯れた色がいわゆる日本語の「灰色」の表す色であるとは考えにくい。(15)では植物が “dry out” した時、また(16)では花が “fresh” でなくなった時の、元々の緑や紫といった「色味がなくなった」様子を *gray* が表していると考えられる。

この章で例文(4)から(16)を分析した結果から、これらの例文に見られる *gray* に共通して言えるのは、「色味がない」状態を表しているという点である。年老いた時の髪や髭、年老いた時あるいは病気になった時の顔、枯れて乾いた植物、いずれも本来持っていた色味を失っている。

「色味」は色彩研究では「色相」と呼ばれる性質に相当する。「色相」を持たない色彩語としては *gray* の他に *black* と *white* も含まれる。*gray* はもちろん基本的には *black*, *white* とは別の色彩を表す語であるが、「色相を持たない色」を代表する語として、時に *black*, *white* をも含んで用いられる場合がある。次に挙げる(17)はその例である。

(17) Bergen airport was pretty much like any other — cleaner, perhaps, but greyer. It was full of people in drab clothes drinking black coffee and eating horrible-looking cream cakes.

ベルゲン空港の様子を表す文章の一部だが、空港の様子を *grey(-er)* と描写している。そしてそこに具体的に存在するものとして、“drab clothes,” “black coffee,” “cream cakes” を並べている。衣服の *drab* は灰色などくすんだ色を表し、“black coffee” は黒、“cream cakes” はクリームの白を思わせる。この場面では灰色も黒も白も、色味のないものは全て *grey* にまとめて表現されているのである。

日本語の「灰色」は本章で扱った(4)~(17)の場面においては用いられにくい。これは、日本語の「灰色」には「色相がない」性質に焦点を当てて表す機能がないことが理由であると考えられる。仮に言語以外を主な研究対象とする色彩物理学や美術などの分野での色彩研究において、「灰色」は「色相のない」色だと説明されたとしても、その説明はそのままあらゆる言語における色彩語彙の体系に組み込まれる性質ということにはならない。英語話者にとっての *gray* は「色相がない」色だが、日本語使用者にとっての「灰色」は、「色相がない」性質を表すための語ではない。

3. Gray light: 光を表す *gray*

日本語の「灰色」が「光」を形容する例は、修辭的な表現では多少見られるものの、一般的な日本語使用の場面ではまず見られない。これに対して、英語の *gray* が“light”を形容する例は多く、修辭的な要素もなく一般的に用いられている。次の例(18)では夜明けの光を、(19)では夕暮れの光を“gray light”が表している。

(18) All through that night into the gray light of dawn and on until the shadows disappeared in the midday sun, . . .

(19) He arrived just at the time of day when the low, gray light changes to dusk.

(18)のようにしらじらと夜が明けて闇ではなくなる時の空の明るさを表現し、(19)のように日が暮れて暗い闇になろうとする頃のぼんやりとした空の明るさを表現する“gray light”は、明るい昼の“white light”と暗い“black night”の間に位置づけられる。

天気が曇りであったり、季節が秋であったり、光量が制限されたりすれば、昼であっても日の光は弱くなり、これもまた“gray light”と表現される。次の(20) (21) (22)はその例である。

(20) In the gray light of a cloudy day, . . .

(21) the soft gray light of that October afternoon

(22) . . . and Vicky pushed the door open. A gray light shone through the windows on the street side and fell on a poster . . .

(20)は曇った日の光、(21)は秋である10月の午後の柔らかか(soft)な光を表し、(22)は戸外の光ではあるが窓を通して部屋の中を照らすことで光量が落ちていると考えられる。

日の光だけでなく月の光も(23)の例のように“gray light”で表される。

(23) . . . midnight's haze shrouded the moon's gray light . . .

月の光の明るさは、やはり“white light”と“black night”の間の明るさというのに変わりはないが、(23)の“gray light”は(18)(19)の夜明けや夕暮れの場合に強く意識される「暗闇ではない」というように闇との区別を意識するというよりも、「明るく輝く光」と明るさを意識していると感ぜられる。月の“gray light”が“midnight's haze”と対比的に用いられているからである。明るく輝く月の光が、真夜中のもやに邪魔されているのである。

人工の光も次に挙げる(24)のようにまぶしくない(soft)ものは“gray light”と表される。

(24) the soft, gray light from the TV

(24)ではテレビが発する光を“gray light”が表している。

光を表す *gray* は光量が高い状態を表す *white* と光量のない状態を表す *black* の間の光量がある状態を表すことが明らかになった。その焦点となる光量は、夜が明け始める頃の光量ゼロではない程度の場合もあれば、曇り日の光量が少し落ち着いた程度のかかなり明るい場合もある。*gray* が表すことのできる光量は、*black* と *white* の間のかかなり幅広いものとなっている。

4. *Gray* の2用法の関連性

日本語の「灰色」に置き換えることのできない英語 *gray* の用法を2章と3章で分析したが、2章で見た「色相のない色」としての *gray* と3章で見た「闇でもなくまぶしい光でもない明るさ」としての *gray* というこの2通りの *gray* の用法は、互いに無関係ではなく、その間には関連があると考えられる。「光」は多くの場合において「色相のない色」に含まれる。「色相のない色」の1種である「光」が、「色相のない色」を表す *gray* で表される。幅広い範囲の光が *gray* と捉えられるが、光の光量がゼロになると *black*、光量が最大になると *white* となる。色相のない3色の色彩語が、光を表す形容詞として機能するのである。次の(25)はこの *gray* をめぐる「色相」と「光」の関係を明確に示す例となっている。

(25) There was no color to the sky. Only the fading of a gray light in a gray sky that suddenly went black.

(25)は空の様子を描写する文章であるが、まず最初の文で空に「色」(color)がなかったと言う。この「色」(color)とは「色相」に相当する。空には「色」つまり「色相」が見られない。そしてこの「色相のない」空は、次に続く文で“gray sky”と描写される。また同時にこの空のぼんやりとした明るさは“gray light”と表される。同じ *gray* という語で「色相ゼロ」と「穏やかな明るさの光」が表される時、「色相」と「明度」は一度ほぼ一体化していると思われる。そして空の様子を認知し表現するその焦点は、「色相」から「明度」へと変換している。*gray* と表された光はやがて消えて「光量ゼロ」になると、その真つ暗な状態は *black* と表されるのである。

5. 結語

英語の *gray* と日本語の「灰色」の用法についてコーパスを用いて比較すると、英語の *gray* には、日本語「灰色」が一般には形容しない物を形容の対象とする例が見られた。その例は2種類に分けられ、一つは“gray hair”という表現に代表される「色相のない」状態を表し、もう一つは“gray light”に代表される「一定の明るさがある」状態を表す。

2種類に分けられた用法ではあるが、この2種類の用法は関連がある。第二の「明るさがある」状態を表す用法は、第一の「色相のない」状態を表す用法に基づくものと考えられるのである。

英語の *gray* は *black*, *white* と共に、英語の他の色彩語のように「色」を表すこともあるが、「色相がない」状態を表す、「明るさ」を表す、という他の色彩語にはない特徴を持ち、英語の色彩語彙の中で特殊な位置を占めている。一方、日本語の「灰色」には、こうした *gray* に見られるような特徴はない。日本語において「灰色」は「黒」「白」と共に、他の色彩語と同列に捉えられる「色」であると考えられる。日本語の「灰色」「黒」「白」は「赤」や「青」と同じような「色」であり、「色相」があるかないかという点については英語ほど区別して意識されてはいない。さらに「光」など「明るさ」については「明るい」「暗い」といった他の形容詞がこれを描写する役割を担っている。「白」や「黒」は「白光」「漆黑」と明るさ暗さを表す定表現に含まれることはあるが、「白い」「黒い」という形容詞として自由に明るさ暗さを表すことはない。日本語においては「色彩」と「明るさ」は明確に区別されており、「色彩」を表す語彙と「明るさ」を表す語彙はそれぞれ別に存在する。

本稿で明らかになった、「色相がない」状態を表す、「明るさ」を表す、といった英語 *gray* の特徴的な用法の存在は、英語という言語において「色彩」と「明るさ」が明確に区別されるまでに至らず、*gray*, *black*, *white* の3つの色彩語を介して曖昧に連続していることを示しているのである。

参考文献

- Berlin, B. & Kay, P. (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*, University of California Press.
- Biggam (2012) *The Semantics of Colour: A Historical Approach*, Cambridge University Press.
- Bricker, V. R. (1999) "Color and Texture in the Maya Language of Yucatan," *Anthropological Linguistics* Vol. 41, No. 3 (Fall, 1999), pp. 283-307, The Trustees of Indiana University on behalf of Anthropological Linguistics.